

あとがき

序文で触れた二つのルネサンス観を意識した方もべつに気にかげずに読んだ方も、これがルネサンスの実相、それもほんの一部分だが——であることを知ってほしい。ポツカッチョが活写した、人間それじたいから発せられた機知、肉欲（生身）の肯定、欲心の是認といった新しいタイプの、所謂ルネサンス的人間も現われれば、カンパネッラの位置する前近代と近代の間のねじれた立場もあった。また印刷術の発達による知の流布と拡張をはじめとして、ルネサンス期で尊重された学知や人間観も緩った。三つの知のタイプを抱えていたカルダーノも、カンパネッラと同じく魔術の知の体現者であったと言える。

このようにルネサンスの知は多様である。これを万能人と呼ばれる一人の人間が体現していることもあれば、三百年間のある一時期に箱庭的に集中している場合もある。

本研究は、ルネサンスの知をマクロコスモスとすれば、まさしくルネサンス的に、そのミクロコスモスとして存在すると考える。

なお本論を構成するうえで、以下の論文をそれぞれ大幅に、加筆・訂正を施し、削除も行なった。

- 「知のメディア」（『月刊百科』一九九二年一月号、平凡社）
- 「 \wedge 文法 \vee の位置」（『月刊百科』一九九二年四月号、平凡社）
- 「共振の瓦解」（『月刊百科』一九九二年八月号、平凡社）
- 「第三の魔術」（『月刊百科』一九九三年十二月号、平凡社）
- 「 \wedge 有用性 \vee の意義」（『月刊百科』一九九四年五月号、平凡社）
- 「死に際の魔術」（『春秋』一九九〇年四月号、春秋社）
- 「機知の勝利」（『春秋』一九九〇年七月号、春秋社）
- 「カルダーノの知について」（『イタリア学会誌』三十二号、イタリア学会、一九八三年）
- 「カンパネッラ『ガリレオの弁明』」（『地中海学研究』十号、地中海学会、一九八七年）
- 「円環の枠組——カンパネッラの空間性」（『極』二号、学芸出版社、一九八四年）
- 「十六世紀のヨーロッパ精神」（『KAWASHIMA』二十六号、川島織物PR誌編集委員会、一九八八年）
- 「魔術師デッラ・ポルタにとっての性交」（『別冊歴史読本・特別増刊』十六号、新人物往来社、一九九四年）
- 「預言者カンパネッラ」（『別冊歴史読本・特別増刊』二十四号、新人物往来社、一九九五年）
- 「エリトピアの修辞学」（『イタリア・ルネサンス文化』所収、紀伊国屋書店、一九八八年）
- 「 \wedge 心臓を食う話 \vee の視座」（『岩倉具忠先生退官記念論集』所収、一九九七年）

\wedge 了 \vee